

チビッコレスリングの継続要因に関する研究 A study on Adherence of wrestling in children

1K07B520-9

指導教員 主査 木村和彦 先生

山内 真志

副査 太田章 先生

【緒言】

近年の日本レスリングは男女ともに世界で活躍している。北京オリンピックでは6個のメダルを獲得した。そのうち5個のメダルはチビッコレスリング出身の選手によってもたらされた。2010年アジア大会のフリースタイル代表選手では、11クラス中8クラスの選手がチビッコレスリング出身である。

現在のチビッコレスリング選手数は約4000人と推定される。日本のレスリング人口が約1万人とされる中、その4割を占めている。北米や旧ソ連といった大国のレスリング競技人口は100万人を超えると推定されており、その中で日本レスリングが世界で活躍するためには約4割を占めるチビッコレスリング選手に対する指導やクラブ運営、普及活動を充実させることは非常に重要である。そこで、子どもたちのレスリング継続要因を知ることによって、今後の日本レスリング発展に役立つ示唆を得られると考える。

【研究目的】

本研究では子どもたちのレスリング継続要因を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

調査対象は埼玉県、東京都、静岡県、愛知県、三重県の少年少女レスリングクラブに所属している選手142人(男子94人、女子48人)である。

調査方法は質問紙調査法を用いて、練習中の休憩または練習終了後に質問紙を配布し、その場で記入してもらいクラブごとに集めて回収した。回収数は142部、有効回答数は136部(有効回答率95.8%)であった。

調査内容は、属性・開始動機・継続意欲・活動満足度・継続動機によって構成されている。

分析方法はSPSSを使用し、クロス集計・ χ^2 検定・因子分析・t検定・一元配置分散分析・重回帰分析を行った。

【結果と考察】

属性において、競技開始年齢は平均5.2歳と幼年期から開始され、体力づくりを目的としたマット運動の延長にレスリングがあると考えられる。また継

続意欲に関係性がみられたのは、「競技レベル」と「1週間の練習回数」であった。たくさん練習するほど競技レベルが高くなり、試合に勝つ喜びが継続意欲につながると考えられる。また、学年において継続意欲と低度の正の相関がみられた。学年が上がるにつれて、進学など将来について考える機会が増えるためであると推察した。

継続動機24項目について因子分析を行った。因子負荷量が0.400以上の項目に着目して検討したところ、5つの因子が抽出された。それぞれ抽出順に第1因子は「学び成長」、第2因子は「挑戦」、第3因子は「友好」、第4因子は「競技志向」、第5因子は「将来性」と命名した。これらの因子得点をもとに継続意欲とのt検定を行った結果、「学び成長」「挑戦」「競技志向」「友好」の4因子で有意差がみられた。この4因子を高めることが継続意欲の増加につながると考えられる。

各因子を独立変数、継続意欲を従属変数として重回帰分析を行った。その結果「挑戦」因子の標準化係数が有意であった。

各項目別に継続意欲との相関係数を分析した結果、「オリンピックに出たいから」の項目において、最も高い相関係数がみられた。レスリングにおいてオリンピックは最高峰の舞台である。この舞台を目標としているか否かという点が継続意欲を決める要因であると推察する。

【まとめ】

継続要因に関して「オリンピックに出たいから」「あこがれの選手のようにになりたいから」といった項目から、「目標の有無」が継続意欲に影響を及ぼすといえる。また、「試合に出たいから」「強い選手とたたかいたいから」「勝つとうれしいから」といった項目から、「試合での活躍」もまた継続意欲に影響を及ぼすといえる。これらの結果から、クラブでは高い目標を意識させ、試合に勝たせることで選手の継続意欲を高めることができる。しかし、クラブにおける指導では指導者の力量や人間性に左右されるため、指導者が大きな継続要因となり得る。したがって、指導者研修や講習会の充実させることが重要である。そのためには閉鎖的なクラブ間の関係を改善することも急がなければならない。